

【論文】

イザイホーが久高島の女性に与えたもの

——2017 年のインタビュー記録から——

山 本 恭 子

は じ め に

イザイホーは沖縄県久高島において執り行われてきた女性が神女（ハミンチュ）に就任するための儀式であり、12年に一度、行われてきた。久高島では年間20以上の多くの神行事（表1）が住民の生活に息づいており、神女はこれらの神行事を執り行うという重要な役割を担ってきた。しかし、イザイホーを受けるためには、島で生まれ育ち、島の男性と結婚していることなど、厳しい決まりがあるため該当者が減少し1978年を最後に行われてない。そのため、イザイホーを受けた神女は現在、最も若くても70才代である。彼女たちは高齢でありながら自宅の商店の店番や浅瀬でタコや貝を捕ったり、家事を担っているだけでなく、久高島での重要な役割であるウミヘビ漁や薫製作業を担っている。また、島の集落内にはベンチや商店の店先など、人が集まる場所が数カ所あり、そこに夕方になると、決まったように人が集まり、海や景色を眺めたり、話をしたり、団らんの時間を過ごしている。そして、生活の中には神への感謝と祈りが存在する。

かつて久高島では島で生まれ育ち、一定年齢（30才から41才）になった主婦は神女になることになっており、その就任の儀式がイザイホーである。このとき、女性は祖母の香炉すなわち祖母霊を引き継ぐ。イザイホーを受けて神女となった女性はナンチュ（30～41才）、ヤジク（40代）、シュリユリタ（40代後半～50代前半）、ウンサクー（50代後半）、タムトゥ（60～70才）となり島で行われる神行事を支える。70歳でテーヤク（退役）を迎え島で行われる神行事の役割から引退する。神女に就任した女性のもうひとつの役割は家族を守護することであるが、これは就任後、一生涯をとおして続く。イザイホーの本祭りは旧暦の11月15日から4日間にわたって執り行われ、その1ヶ月前にイザイホーを行う事を神々や御嶽の守護霊に報告する儀式から始まる。本祭りの概要を表2にまとめた。

イザイホーは学術的にも重要な意味を持つため、多くの文献が出版されているが、事実関係を記録したものがほとんどである。本研究では、イザイホーを受けた女性にインタビューを通じて、その生涯について、特にイザイホーを受けて神女となったことについて、そのときの様子や心情について語っていただき、当事者の視点で記録し、イザイホーが彼女たちの生き方にどのよ

表1 久高島の年中行事

祭祀名	祭日 (旧暦)	祈願内容
正月	1月1日～3日	健康祈願
ピーマッティ	1月吉日	火の祭
ソージマッティ	1月中旬ミンニー	麦の穂祭
ヒータチ	1月か2月ミンニー	大漁祈願
ウブヌシガナシー	2月中旬ミンニー	健康祈願
三月網	3月3日	漁労訓練
竜宮マッティ	3月3日	魂鎮め
マッティ	3月中旬ミンニー	麦の収穫祭
ハマシーグ	3月29日	害虫祓い
ハンザアナシー	4月中旬ミンニー	祓い潔め
ソージマッティ	5月中旬ミンニー	粟の穂祭
キスクマーイ	6月1日	キスク漁
マッティ	6月中旬ミンニー	粟の収穫祭
ミルクウグワッティ	6月16日	太陽の祭
ウプマーミキ	7月中旬ミンニー	大漁祈願
七月網	上祭祀後ミンニー	大漁祈願
ヤーシーグ	7月29日	害虫祓い
カシキー	8月9日	豊作祈願
ハティグワッティ	8月10日	お払い・健康祈願
ヨーカビー	8月11日	うたき参り・お祓い
テラガーマ	8月12日	お祓い
十五夜	8月15日	月の祭・健康祈願
ハンザアナシー	9月中旬ミンニー	祓い潔め
マーミキグア	10月中旬ミンニー	大漁祈願
アミドウシ	11月13日	大漁祈願
フバワク	11月中旬ミンニー	お祓い・健康祈願
ピーマッティ	12月吉日	火の祭の結び
ウブヌシガナシー	12月ミンニー	健康祈願の結び

ミンニーとは壬（みずのえ）、癸（みずのと）、甲（きのえ）、乙（きのと）の4日間をいう

*比嘉康雄（2000）「日本人の魂の原郷沖縄久高島」を参考に作表

表2 イザイホーの本祭り4日間の概要

1日目早朝	「祖母霊の香炉の継承式」	祖母霊の抛り所になる香炉をイザイニガヤー（イザイホーを受ける者）が引き受ける儀式
夕刻	「七ツ橋渡り」	イザイニガヤーが七ツ橋を渡って祖母霊のいる七ツ屋に入っていく儀式
2日目午前	「洗い髪たれ遊び」 （ハシララビアシビ）	七ツ屋（他界空間）で祖母霊と一夜を過ごしたイザイニガヤーがこの世に登場して舞う儀式
3日目午前	「朱付」 （シュリイキ）	祖母霊と合体したイザイニガヤーが守護力を備えたナンチュとしてこの世に登場し、一人前の神女として認証を受ける儀式
4日目午前	「家まわり」 （アサンマーイ）	ニラーハラー遙拝のあと、守護力を備えた神女が家に帰り、守護される者の象徴である兄から酒盃を受ける儀式
4日目午後	「桶まわり」 （グウキマーイ）	外間殿、久高殿においてイザイホー無事終了の祝宴の儀式

*比嘉康雄（1989）「神々の古層⑤主婦が神になる刻 イザイホー〔久高島〕」を参考に作表

うな影響を与えたのかを考察した。

方 法

本研究ではイザイホーを経験した女性にイザイホーを受けたときの様子や心情に焦点を当てながら、その生涯についてお話していただき、フィールドノートに記載してまとめた。

- 1) 対象：久高島在住のイザイホーを経験した女性を対象とし、研究目的や趣旨を説明し協力を依頼し、承諾が得られた方にインタビューを行った。イザイホーを受けた女性については文献6)に公開されている名簿をもとに探した。
- 2) インタビュー：あらかじめ決めたインタビュー項目に沿って行った。その際に出来るだけ自然な会話ができるように録音等はせず、フィールドノートに記録した。
- 3) インタビュー項目：①生まれた年、②イザイホーを受けた年、③子どもの頃のイザイホーとの関わり、④イザイホーを受けたときの様子や気持、⑤神行事についての様子や気持、⑥テークヤクを迎えたときの様子や気持、⑦現在も続けている神事、⑧振り返ってイザイホーを受けたことや神行事を行ってきたことに対する思い。
- 4) 倫理的配慮

研究の趣旨とインタビュー内容について説明し、協力を依頼し、承諾が得られた方を対象にインタビューを行った。対象者が高齢者であることを配慮し、インタビューによる疲労に注意し、1回のインタビューは30分程度とし、聞ききれない場合は複数回に分けて行った。精神的負担を生じさせない配慮として、話したくないことは話さなくても良いことを伝え、話を聞く側の態度としては、共感的態度で臨み、敬意をもって向き合った。

なお、本研究は本学生命倫理委員会の承認を受けて行った。(承認番号：16-11-001)

結 果

比嘉による1979年の記録ではイザイホーを受けた女性の氏名が記録されており、1942年にイザイホーを受けた女性は14名、1954年は7名、1966年は30名、1978年は8名、合計59名である。その中で現在の久高島在住者は31名、老人ホームや娘と暮らすなどの理由で島外に暮らす人は4名であった。その中から、インタビューに協力していただけたのは、13名であった。

1. 生涯をとおしてイザイホーに対するそれぞれの体験と思い

[事例1] H. U さん (1923年生まれ、1954年のイザイホー)

久高島で生まれ台湾に移住し小学6年まで過ごし、那覇に住んでいたが、戦争のため島に戻った。25才で結婚して、26才で長男を出産した。小さい頃からイザイホーを見ていて、自分もあんなふうになりたいと思っていた。イザイホーについては不義理をしていたら七つ橋を渡るとき

に落とされるので、儀式に出ることができるのは誇らしいことであった。イザイホーの円舞に使った扇を開いてかざして凜とした眼差しを見せてくださった。神行事については、大変なこととは思わなかった。神行事に参加できることは楽しい、嬉しい気持、堂々とした気持で、誇りであった。身も心も清らかな、しあわせな人が出ていて、からだが不自由でも出られないので、イザイホーを受けることができない人からうらやましいと思われると思った。テーヤク*1の時は御嶽に来れる最後の日であり、淋しい気持ちだった。御嶽ではご馳走を配って、くばの葉をもって踊った。

[事例2] T. N さん (1925 年生まれ、1966 年のイザイホー)

子どもの頃のイザイホーは普通に見てた。特別な感情はなく、日常的なこととして受け止めていた。イザイホーを受けた時については、年齢が来たら入るから当たりまえと思っていた。ノロさん*2のまねをしてノロさんのおりに歌った。家族がイザイヤマ*3にお弁当を届けてくれたことが思い出として残っている。イザイホーに入ったら年中行事はやらないといけなから、あたりまえのことと思って、みんなと一緒に楽しかった。

昔は八月マッティ*4のグルイ（円舞）のときも大勢の神女が2周円を作ってその中に子どもの円ができて3周だったと、昔の盛大な光景を懐かしむ表情を見せてくださった。テーヤクの時は、それ以降は神行事に参加出来ないで淋しい気持ちだった。生涯を振り返って、イザイホーに入ったから御願みが出来るようになった。家族の為に良かったと思っている。今はイザイホーが行われてないので淋しい。

[事例3] S. N さん (1925 年生まれ、1966 年のイザイホー)

小学校を卒業してパラオに移住し、18才の時に戦争で久高に戻り、23才で結婚した。子どもの頃、イザイホーは見えない。30才の時に台風で海人*5である夫を亡くし、民宿を営み6名の子どもを育てていたのが、苦労していたが、久高に生まれてイザイホーに入らないと良くないとの思いから、また、子どもたちのためにイザイホーに入った。父の母の姉から香炉を受け継いだ。神行事については、みんな一緒に、神様も一緒に笑った。お祈りの前はみんな楽しく話をしていたが、お祈りが始まると静かにした。ノロさんは厳しかった。笑いながら、話しながら、神様も一緒に笑って、祈った。テーヤクの時はさみしかった。

[事例4] K. I さん (1927 年生まれ、1966 年のイザイホー)

子どもの頃のイザイホーでは、お母さんのためにお弁当を作って持って行ったが、特別に何か考えたことはない。自身がイザイホーの時には、みんな一緒なので、自然に入った。ただ、祖母の霊をもらうので緊張した。神行事については、みんな一緒に、自分で家族の健康を祈ることが出来るようになるから、神行事も頑張った。テーヤクの時は晴々とした気持で踊った。

[事例5] K. U さん (1927 年生まれ、1966 年のイザイホー)

中学を卒業して台湾に移住し、4年間して久高に戻った。結婚して7名の子どもを育てた。子どもの頃のイザイホーは覚えていない。イザイホーを受けた時は、足踏みなどどうしてよいか分からないので緊張した。イザイホーに入れるのは嬉しかった。

イザイヤマでは神様がいらして本当に神々しかった。「神様はいらっしゃいますよ」としっかりとした眼差しで教えるような口調でおっしゃった。イザイヤマに入る前に祖母から香炉を受け継いで、それを今も大事に守っている。神行事についてはナンチュ、ヤジク、タムトゥと役目、位が上がり、イザイ神を誇りに思っていた。テーヤクの時は役目を子や孫にゆずる日であり、ひと安心という気持だったが、今はイザイホーが行われていないので心配している。

[事例 6] M. U さん（1929 年生まれ、1966 年のイザイホー）

イザイホーは戦前も中学 2 年生のときも見た。けれど、ただ見ただけ。特別な感情はなかった。日常的なこととして受け止めていた。イザイホーを受けた時は緊張した。参加を希望していた。普通の人間と違うようになる気がした。神女になるという特別な気持ちになった。神行事については、楽しかった。自分の祈りが通じるようになる。一人前の人間になった気持ちで嬉しかった。神様になったと感じた。晴れ晴れした、誇りを感じていた。久高に生まれてイザイホーに入らなければ何も分からないという思いがある。テーヤクの時は、それ以降は神行事に参加出来ないで淋しい気持ちだった。今はイザイホーが行われてないので、これから子どもたちがどうなるか心配している。また、行われることを希望している。

[事例 7] T. N さん（1930 年生まれ、1966 年のイザイホー）

子どもの頃については、姉のイザイホーのことを覚えているが、当時は特に何も思わなかった。自分がイザイホーを受けた時は、難しく考えず、やるべきものと思っていた。ノロさんが恐いので気がたっていた。神行事について、久高島の神行事は大変。若いうちは神行事を単に行事として行ってただけで、神様の力は分からなかった。神行事は女の役目であり、あたりまえのことだと思っていた。神行事に参加しないと神様に怠け者と言われ子どもや旦那にかかわるから、まじめに頑張った。年月を重ねるに従い、家庭はイザイ神で守っていると強く感じるようになった。イザイホーの神様はまさしい*6 と思う。イザイホーを受けて神女になると家族のことを神様にお願いすることができる。イザイホーの神様が私たちを守ってくれている。神様が私を見ている。テーヤクの時は、あー良かったという気持だった。他の神女にお菓子を持ってあいさつに回った。

[事例 8] Y. U さん（1930 年生まれ、1966 年のイザイホー）

店主として、一生懸命に商店をきりもりしていて、お店は繁盛していた。子どもの頃のイザイホーについては、見る機会がなく、ほとんど知らなかった。イザイホーを受けるにあたって、商店をきりもりしていて、それに一生懸命で忙しく、イザイホーを受けたくなかった。しかし、イザイホーに出ないと言ったら転んで足を怪我して、神様から罰が当たったと思って出ることにした。湿布をしてイザイホーに出た。お店を 4 回も建て替えて大きくするのに一生懸命だったので、神行事は大変だった。テーヤクの時は、フボーウタキ*7 で輪になって座って 1 人ずつカチャーシー*8 を踊った。みかんとタンナファクルー*9 をお祝いに配った。これで終わったという嬉しい気持だった。今になっては、子どもたちのことも祈ることができて、みんな健康にこれたので、良かったと思っている。

[事例 9] T. N さん（1937 年生まれ、1966 年のイザイホー）

中学を卒業して本島に移り住み、24 才で結婚した。イザイホーの 1 ヶ月前に久高島に戻った。子どもの頃のイザイホーについては、母のイザイホーの時にお茶やお弁当をイザイヤマに届けに行っておもしろかった。それぞれのお家から色々沢山のものが届けられていて、それをもたらたりして嬉しかった。中学を卒業して本島に移り住んだので、それ以上のことは分からなかった。イザイホーを受けた時は、おばあさんからの霊を受けるという重役のため恐れを感じていた。恐くもあった。神様はいらっしゃるなあと考えた。参加して初めて分かった。1 ヶ月前に島に戻ったばかりだったので、出来るかなあという不安もあった。神行事については、本島から戻ってきて何も出来なくて、畑も出来なくて、ブタのこやし臭くてもどしたり、大変だった。日々の生活が大変だった。神行事は実際に行いながら分かった。良かった。テーヤクの時、30 才から 70 才までの 40 年間、長かった。無事に終わったという気持、嬉しくもあり、感謝の気持もあった。現在も家族、親戚のために欠かさず祈っているが、精神的におちつく。楽しい気持ちになる。

[事例 10] T. U さん（1932 年生まれ、1978 年のイザイホー）

4 歳の時に久高のおばあちゃんに引き取られて育てられ、おばあちゃんから行事の踊りを教わっていた。イザイホーも見ている。イザイホーを受けた時は、人前に出ての儀式なので、着物が乱れたり、帯が外れたりしないようにと緊張した。イザイヤマにはたくさんのご馳走が届いて楽しかった。神行事については、しきたりなので、出ないと落ち着かない。不健康だったり、親戚に不幸があると出られないので、幸せと思えた。神女としての役割を担うことが誇らしい。朝、暗いうちにシャワーをして支度して出て行くことが楽しかった。楽しかったが、上の人が怖いので気を遣った。子どもの頃からおばあさんに行事の踊りを教わっていたので、良く出来た。テーヤクの時は、お祝いだから、ニガナ*10 を料理してモンパノキ*11 の葉に乗せて食べた。楽しかった。スジ*12 をお餅のように作り替えてみんなに配って終わったことを伝えた。今でもみんなの健康を祈る。そうすると気持ちが整頓できて落ち着く。心は 17 才、18 才です。久高の友達や育ててもらった祖父母が一番。イザイホーが次々あれば良いのになあと思う。

[事例 11] Y. F さん（1940 年生まれ、1978 年のイザイホー）

子どもの頃はイザイホーを見ていたが、特に何も思わなかった。イザイホーを受けると家族のことを神様にお願いすることができるので、結婚して子どもができて、家族のために祈りたいと思うようになり受けたいと思うようになった。イザイホーの時は、普段から腰が悪かったので儀式ができるかどうか不安だった。しかし、イザイホーを受けてからは体もしゃきとして元気に過ごしている。イザイホーを終えて、隣近所のひとから女として一人前になったねと言われ、その一言が嬉しかった。神行事について、久高島の神行事は大変。テーヤクまで働き詰めだった。ナンチュのときは裸足だった。時間に遅れてもいけない。普通の会合なら遅れても大丈夫だが、神行事だけは遅れてはいけない。雨が降っても行事はある。特にフバワク*13 はみんなびしょ濡れだった。でも、みんな一生懸命だから、何も感じずに行った。テーヤクの時は、頑張ったんだ

ねーという気持。晴れの日、お祝いの日である。

[事例 12] S. U さん (1939 年生まれ、1978 年のイザイホー)

イザイホーの前年に海人の旦那を亡くして 4 人の子ども育てていた。その為、イザイホーに入らないと言ったら、亡くなった旦那のことよりも子どもたちのことを考えて、入らないといけな
いと叱られた。でも、そのおかげで、みんなに助けてもらえた。神行事は大変だけど、イザイホーに入ると自分で祈ることが出来る。テーヤクの時はさみしい気持だった。今は根人 (ニーチュ)
*14 もいない、後継ぎもいないのでイザイホーが出来なくなった。残念です。

[事例 13] M. U さん (1941 年生まれ、1978 年のイザイホー)

イザイホーが行われる久高殿の近くに住んでいたため、子どもの時から見ていていつかは自分
も入りたと思っていた。イザイホーを受けた時、やっと来たねという気持、晴々とした気持で
嬉しかった。久高島で生まれ久高で結婚した人しか出られない、浮気している人は出来ないから
誇らしい気持。晴れ姿。失敗したらどうしようとも思った。神行事については、60 才以下は下
働きで、60 才を越えると冠をつけることができる。厳しかった。よく怒られたが「ありがとう
ございました」と言って、感謝の気持ちで聞いた。テーヤクの時は卒業した、ひと段落した気持
ちだった。振り返って、イザイホーに入って良かったと思っている。

*言葉の注釈

- *1 テーヤク：イザイホーを受けて神女となった女性が 70 才で退任することで、儀式が執り行われる。
- *2 ノロ：久高島には久高ノロと外間ノロの 2 名が存在しており、島で行われる神行事の司祭の役割を担
っていた (2017 年現在は不在)。
- *3 イザイヤマ：イザイホーが行われる久高殿の裏にイザイホーを受ける女性が 4 日間、籠もる七つ屋が
立てられるが、その場所がイザイヤマと呼ばれる。聖地である。
- *4 八月マツティ：旧暦 8 月 10 日から 12 日に行われる神行事。
- *5 海人 (ウミンチュ)：漁師
- *6 まさしい：久高島では、よく使われることばで、正しい、澄んでいる、強い、すごい、優れているな
どの意味を含んでいる。
- *7 フボーウタキ：久高島の御嶽のひとつであり、神行事のときに神女が祈りをする場所、聖地であり他
界と考えられている。
- *8 カチャーシー：お祝い事の最後に締めくくりとして踊られる。かき混ぜるという意味を持つ踊り。
- *9 タンナファクルー：沖縄で古くから市販されている、小麦粉や黒砂糖を原料とする焼き菓子。
- *10 ニガナ：久高島に自生する野草で、苦い。細かく千切りにして刺身と酢で和えて、久高島では特に行
事の時に食される。
- *11 モンパノキ：熱帯、亜熱帯の海岸地方に生えている、むらさき科の常緑の低木。
- *12 スジ：もち米の粉を水で練って作った餅のようなもの。イザイホーなどの神行事で使われる。
- *13 フバワク：旧暦 11 月に行われる、御嶽、拝所の掃除と一年の御願の結びをするまつり。この日に神
女の役割の交替式や退任式も行われる。
- *14 根人 (ニーチュ)：神行事を行う男性の神職者 (2017 年現在は不在)。

2. 子どもの頃のイザイホーとの関わり

イザイホーが12年に1回しか行われなことから、多くの女性は成人するまでに、記憶に残るイザイホーは1回ないし2回である。そのような状況の中で、自分の母親や姉がイザイホーを受けたときにイザイヤマにお弁当を届けたり、授乳のために乳飲み子を連れて行ったことなどが、半数近くの人に思い出として記憶に残っていた。自分もイザイホーを受けたいと思った人は13名中2名であり、見てない、覚えてないと答えた人が3名、見てたが特に何も思わなかったと答える人がほとんどであった。それは久高島の子どもにとってイザイホーは数多く行われる神行事のひとつであり、日常的な神行事に埋もれていたと考えられる。また、1954年のイザイホーが初めて報道に取り上げられ、世の中に広く知られ、1966年から多くの取材陣が押し掛けたことから、1954年までは島人だけで粛々と行われていた神行事であった。そのため、子どもたちの目にも特別なことと映らなかったのではないかと考える。

3. イザイホーを受けたときの様子や気持

イザイホーは女性が神女に就任する重大な儀式である。しかし、インタビューをする中で多くの女性がイザイホーを「受ける」ではなく「入る」という表現をされることから、イザイホーは儀式を示す言葉であると同時に神行事を執り行うための組織という意味を持っていると考えられる。イザイホーを受けたときの様子や気持については【祈る資格】、【あたりまえのこと】、【躊躇する思い】、【祖母からの霊を継承することに対して重み】、【嬉しい、誇り、晴れ姿】、【きちんと出来るかどうかという不安】、【神に対する恐れ】、【神の存在を認知する】【島の人々から認められる】という概念が抽出された。

多くの女性が主婦として家族を持つてはじめて、家族のことを神様をお願いしたいと考えるようになり、イザイホーを受けたいと思うようになる。すなわち、【祈る資格】を得たいのでイザイホーを受け、同時にイザイホーを受けた女性は久高島の神行事を支える務めを持つことになる。

その時の思いは人それぞれであった。「年齢が来たら入るのが当たり前」、「みんな一緒だから」、「久高に生まれてイザイホーに入らないのは良くない」、「自然に入った」というように【あたりまえのこと】、そして【嬉しい、誇り、晴れ姿】として受け止めていた人もあれば、お店をきりもりして忙しいこと、久高島では海人の夫を海難事故で亡くし、苦勞して子育てをしている女性も少なくなく、イザイホーに入ること、神行事との両立に不安を持ち、【躊躇する思い】を抱いた人もあった。

また、イザイホーに入る時に【祖母からの霊を継承することに対して重み】を感じていた。不義理をしていたら七つ橋から落とされるという言い伝えや、仕事が忙しくてイザイホーには出ないと言ったら転んで足を怪我して神様から罰があたったと思って出る事にしたなど、【神に対する恐れ】を抱く儀式であった。また、大勢の人が見ていること、当日、足に怪我をしていたり、腰を痛めていたりして、儀式に耐えることができるだろうかという【きちんと出来るかどうかと

いう不安】もあった。

しかし、イザイホーを受けてみて、「イザイヤマには神様がいらして神々しかった」、「神様はいらっしゃいます」、「普通の人間と違うようになった」、「神女になった気持がした」、「参加して初めて神様はいらっしゃると思った」など、【神の存在を認知する】体験をしており、神を信じることに繋がっている。さらに、「イザイホーを終えて近所の人から女として一人前になったねと言われ、その一言が嬉しかった」という言葉からイザイホーには【島の人々から認められる】という意味付けが存在していたと考えられる。

4. 神行事についての様子や気持

【あたりまえのこと】、【行事の厳しさ】、【ノロを頂点とした厳格な体制】、【誇り】、【楽しかった】、【みんなで】【神の存在・感謝】、【祈る資格】の概念が抽出された。

久高に生まれ、神女となった女性にとって神行事は「大変なこととは思わなかった」、「イザイホーに入ったら年中行事はやらないといけない」、「あたりまえのこと」、「しきたりなので出ないと落ち着かない」、「雨が降ってびしょ濡れになっても何も感じずに行った」など、【あたりまえのこと】として受け止められていた。

具体的な話を聞くと「久高の神行事は大変」、「テーヤクまで働きづめだった」、「ナンチュの時は裸足だった」、「60才までは下働きで、60才を越えると冠が出来る」、「普通の会合なら遅れても大丈夫だが、神行事だけは時間に遅れてはいけない」などが語られ、【神行事の厳しさ】が伺える。特に夫を亡くして子どもを育てている人や民宿や商店を営む女性にとっては大変なことだった。また、「ノロさんはきつかった」、「上の人が恐いので気を遣った」、「厳しかった」、「よく、怒られたが、感謝の気持ちで聞いた」などが語られ【ノロを頂点とした厳格な体制】が出来ており、ノロは神女や島人から敬われていたことが伺える。

「神行事に参加出来ることは誇り」、「堂々とした気持」「晴々とした気持」「身も心も清らかな人が出てるのですから」、「誇りを感じていた」、「神女としての役割を担うことが誇らしい」、「踊りは子どもの頃から祖母より教わっていた」などが語られ、神行事に参加することを【誇り】に感じていた。また、「みんなと一緒に楽しかった」、「お祈りの前はみんなで楽しく話をした」、「笑いながら、話しながらみんな一緒に」、「みんな一緒にだからね」などが語られ、【みんなで】という要素が強く語られた。さらに、「嬉しい気持」、「楽しかった」、「不健康だったり、親戚に不幸があると出られないので、幸せと思えた」、「朝、暗いうちにシャワーをして支度していくことが楽しかった」など【楽しかった】ということが語られた。

さらに、【神の存在・感謝】については「神様も一緒に笑って、祈った」、「久高に生まれてイザイホーに入らなければ何も分からない」、「神行事をやらないと旦那や子どもに悪いことがおこる」、「若いうちは神行事は単に行事として行い、神様の力は分からなかったが、今はイザイ神に守ってもらえると感じて感謝している」などが語られ、多くの神女が神行事を行ううちに年月を経て神の存在を確信し、感謝に至ったことが伺える。

【祈る資格】については「自分で家族の健康を祈ることが出来るから、神行事も頑張った」、
「神行事は大変だけど、イザイホーに入ると自分で家族の健康を祈ることが出来る」、「自分の祈
りが通じるようになる」、「一人前の人間になった気持で嬉しかった」、「神様になったと感じた」
などが語られ、大変な神行事を遂行することによって、祈る力を手に入れることができたと伺え
る。

5. テーヤクのときの様子や気持

【神女としての役割の終わり】、【淋しい気持】、【祝い・晴々とした気持】、【やり遂げたという気
持】、【ご馳走・踊り】という概念が抽出された。

「御嶽に来ることができる最後の日」、「それ以降は神行事に参加出来ない」（3名）などが語ら
れ、【神女としての役割の終わり】を受け止めたときであった。また、その日は「晴れの日」（2
名）、「お祝いの日」（2名）、「嬉しかった」（2名）「楽しかった」（2名）と表現された言葉から、
【祝い・晴々とした気持】であったことが伺える。一方で「淋しかった」（5名）ということばも
聞かれ、【淋しい気持】もあった。また、「ひと安心」、「役目を子や孫にゆずる日」、「あーよかつ
た」、「これで終わった」、「40年間長かった」、「無事に終わった」、「感謝の気持ち」、「頑張った
んだねという気持」、「卒業した。一段落した。」などそれぞれ表現は異なるが【やり遂げたとい
う気持】が語られた。神女という大きな役割を終える人生の節目として、その日の様子は「ご馳
走を配って踊った」、「踊った」、「お菓子を持って挨拶に回った」、「御嶽で輪になって座って1人
ずつ踊った」、「みかんとタンナファクルーをお祝いに配った」、「ニガナのあえものをモンパの葉
にのせて食べた」、「スジをお餅のように作ってみんなに配って終わったことを伝えた」などが
【ご馳走や踊り】として、それぞれの心に残っている。

6. 現在と振り返って思うこと

【家族の健康を祈願できて良かった】、【祈ることで落ち着く】、【イザイホーが行われることを
希望】の概念が抽出された。

「イザイホーに入ったからお願いができるようになった」、「家族のために良かった」、「イザイ
ホーの神様に守っていただいて良かった」、「家族みんなが健康にこれで、良かったと思ってる」
「イザイホーに入って良かったと思っている」という語りから【家族の健康を祈願できて良かった】
とされていることが分かった。さらに、「今も祈ることで精神的に落ち着く、楽しい気持にな
る」、「みんなの健康を祈る。そうすると気持が整理できて落ち着く」、「お祈りをしないと淋し
い気がする」という語りから【祈ることで落ち着く】ことが示された。現在、イザイホーが行わ
れていないことについてほとんどの方が心配しており、「イザイホーよ幾代までもと言いました
よ（なのに今はやってない）」、「今はイザイホーが行われてないので淋しい」、「今は行われてな
いので心配」、「今は根人もいない、後継ぎもいないのでイザイホーができなくなって残念」、「ま
た、行われることを希望している」、「イザイホーが次々あれば良いのになあと思う」ことが語ら

れ【イザイホーが行われることを希望】していることが述べられた。

現在、全ての神女はテーヤクしているが、毎朝、家族とイザイホーの神様のためにお茶を入れ、家族の健康や安全をお願いし、特に干支の日にあたる家族のためには、特別にお祈りをしている。さらに旧暦の1日と15日には香炉にお香を立ててお祈りをしている。また、現在はイザイホーを受けてない神女によって神行事が受け継がれ、執り行われており、神行事の日にはテーヤクした神女たちは参加はできないが、家から行事が無事にできるようにお祈りをしている。

7. イザイホーが女性の生涯に与えたもの

久高島の女性にとって、イザイホーに入ることは家族のために祈る資格を得るために必要なことであった。久高島の殆どの男性が海人であり、海難事故も多く命がけの仕事をしていることが背景としてあり、久高に生まれた女性はイザイホーに入って兄や夫をはじめとした家族の安全や健康を祈り、守ることが大切な役割であった。イザイホーに入ることは女性としてあたりまえのこととして受け取っており、神を信じ、自らの役割を果たそうとする清らかな精神をみることができる。イザイホーを受けることは女性にとっては誇らしいことであり晴れ姿であるが、それは神女としての入り口であり、年間に20以上ある神行事を支えて行くうちに本当に祈ることができるようになり、神の存在を実感し感謝するようになる。神行事は大変なことであるが、みんなで支えることで、お互いを知り、思いやり、助け合うこと、仲間としての社会ができていたのではないかと考えられる。また、厳しい久高島の神行事を支えた自信と誇りが、神女として役割を担っていた時からテーヤク後まで生涯を通して個々の生き方を支えている。そして、現在も家族の健康や安全を毎朝、欠かさず祈り、守っていることから、自信と強さを感じることができる。神を信じ祈ることで、こころ豊かで安らかな日々をおくっている。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、インタビューの依頼を温かく受け入れていただき、ご協力いただいた皆さまに深く感謝申し上げます。また、アドバイスをいただいた西銘佐和子様をはじめ久高島の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 赤嶺政信 (2014)「歴史のなかの久高島-家・門中と祭祀世界-」慶友社
- 2) 当間一郎、友利安徳 (1982)「神々のふるさと久高嶋 イザイホー・生活」沖縄公論社
- 3) 比嘉康雄 (1989)「神々の古層①女が男を守るクニ 久高島の年中行事Ⅰ」ニライ社
- 4) 比嘉康雄 (1990)「神々の古層②女が男を守るクニ 久高島の年中行事Ⅱ」ニライ社
- 5) 比嘉康雄 (1989)「神々の古層⑤主婦が神になる刻 イザイホー [久高島]」ニライ社
- 6) 比嘉康雄 (1993)「神々の原郷 久高島 上巻」第一書房
- 7) 比嘉康雄 (1993)「神々の原郷 久高島 下巻」第一書房
- 8) 比嘉康雄 (2000)「日本人の魂の原郷 沖縄久高島」集英社

[やまもと ゆきこ 文化人類学]